

■高校野球のケーススタディー（第33回）■



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

高校野球における公式試合や練習試合の中で生じたプレイの中で、“こんなプレイ、ルールではどうなるの？”といった疑問について、ルールの側面から解説します。

○ ボールを持たない野手が打者走者と接触しましたが・・・

第105回選手権記念兵庫大会で実際に生じたプレイを紹介します。

1アウト満塁でライト線のヒット。3塁・2塁走者が生還。1塁走者は右翼手から好返球で、三塁本塁間でのランダウンプレイでタッグアウトとなり2アウト、その間、打者走者は2塁へ達しましたが、1塁を回ったところで1塁手と接触がありました【その時、1塁の審判員は接触があった時点でオブストラクション（走塁妨害）のシグナルを出していた】。そこで、プレイが一段落した後、審判員4氏で協議した結果、2塁ベース上の走者を3塁へ進め、得点2、2アウト3塁でゲームが再開されました。このプレイについて、ルールの側面から見ていきましょう。

このプレイのポイントは、打者走者が1塁を回ったところで、ボールを持たない1塁手と接触していることです。公認野球規則では、次のように定められています。

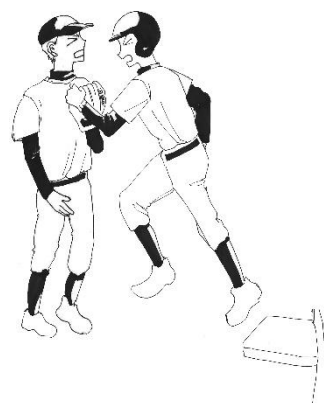
【規則 6.01(h)(2)】

走者を妨げられた走者に対してプレイが行われていなかった場合には、すべてのプレイが終了するまで試合は続けられる。審判員はプレイが終了したのを見届けた後に、初めて“タイム”を宣告し、必要とあれば、その判断で走塁妨害によってうけた走者の不利益を取り除くように適宜な処置をとる。

- 打者走者は正しい走塁を行っており、ボールを持たない1塁手と接触していますので、走塁妨害をうけている。
- 走塁妨害をうけた打者走者に対して、プレイが行われていなかった（打球を野手が処理している）。

この2点をもって、【規則 6.01(h)(2)】が適用されることとなります。

本ケースでは、1塁の審判員は接触があった時点でオブストラクション（走塁妨害）のシグナルを出したうえで、プレイが終了するまでプレイを続けさせ、プレイが終了した後、審判員は4氏で協議し、走塁妨害によって受けた走者の不利益を取り除く処置をとりました。その結果、審判員は、打者走者が妨害をうけていなければ3塁へ進塁できていたものと判断し、走者を3塁へ進めました。なお、ランダウンプレイでアウトとなった1塁走者は、そのままアウトとして処置されます。これは、打者走者の走塁妨害と1塁走者に対するプレイとは何ら関係がないためです。



次に少し状況を変えて考えてみましょう。

それでは、このケースで1塁走者が、ランダウンドレイ中に野手のプレイを妨害した場合は、どうなるでしょうか。

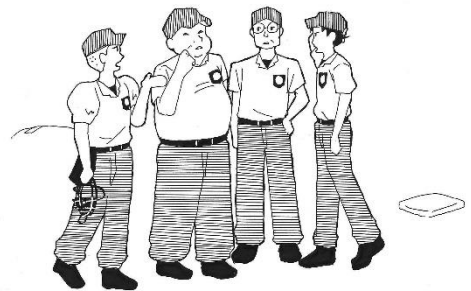
公認野球規則では、次のように説明されています。

【規則 6.01(a)[原注2]】

三塁本塁間で挟撃された走者が妨害によってアウトを宣告された場合には、後位の走者はその妨害行為が発生以前に、たとえ3塁を占めることがあっても、その占有は許されず2塁に帰らなければならない。妨害が発生した場合にはいづれの走者も進塁できないこと、および走者は正規に次塁に進塁するまでは元の塁を占有しているものとみなされることがその理由である。

この規定によると、打者走者が1塁手による走塁妨害がなければ3塁に進塁できていたとしても、前位の1塁走者が三塁本塁間のランダウンドレイで守備妨害を行った場合は、打者走者は3塁の占有は許されず、2塁にとどまることとなります。したがって、この場合は得点2、2アウト2塁で試合が再開されます。

今まで見てきたように、類似したケースでも妨害の状況によっては、走者の位置が異なることがあります。



- 今後も試合で実際に起きたプレイをルールの視点から解説していきますので、生徒の皆さんもどうぞご協力ください。共にルールの習得を図っていきましょう。

表題デザイン協力：兵庫県立姫路工業高等学校デザイン科

表題デザイン：谷口 真奈佳さん（74回生）

イラスト：岩村 里美さん（3年） 中安 慶さん（3年）